



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2011.7.1発行 NO.19

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

巻頭言 「研究機構」の6年とこれから

故 小川居元会長の「研究所」構想が「研究機構」として実現してから6年、代表・研究企画委員会委員長の任に当たってきましたが、このたび藤森平司代表、鈴木眞廣委員長にバトンを渡すことができました。とはいえ、会員の皆さんからの期待に応え十分その任を果たすことができたか、忸怩たるものがあります。

委員会では月1回の会合で、内外の情報や委員が抱えている課題をもとに話し合い、テーマを設定して研究者に研究を委託したり、ときにはセミナーを開いたりワークブックを作成したりしてきました。ニュースレターも一定の役割を果たしてきたと思います。

この間ずっと追い求めてきた課題は「保育の質」とは何か、質をどう高めるかという課題でした。「保育の質」を語るとき、必ず登場するのが「評価」の問題です。通常「評価」というとPDCAサイクルのCの部分として理解されますが、私たちは、むしろ、保育の中のさまざまな場面の振り返りとそこからの学びこそが保育の評価なのだと考えてきました。

今後、その過程にどう親・保護者もかわかり、「ともに育てる」関係をどう築いていくか、さらに、子どもの育ちを支える地域・コミュニティーをどうつくって

いくか、といったことが大きな課題として残されています。

ところで、3・11の東日本大震災と福島原発事故以後、私の頭をとらえて離さないのが「自然との共生」というテーマです。識者は早くから警鐘を鳴らしていましたが、ひたすら快適さ、便利さを追求し、自然を遠くに押しやり資源やエネルギーを浪費してつくりあげてきた現代の生活を見直し、自然との共生を基本にした生活をつくりあげていくという課題を、現実には迫られた課題として、私を含め多くの人々が感じたのではないのでしょうか。

まずは私たち大人が生活のあり方を変えることです。が、保育に置き換えれば、「自然と親しむ」「暑さ、寒さもある四季を感じながら生活する」「身体を動かして働くことを厭わず楽しむ」「自然への感謝、労働への感謝の気持ちをだいにする食生活」など、多くの保育の場で既に実践されていることが浮かびあがってきます。これがどう本研究機構の研究課題になるのか、私もわからずにいますが、ご一緒に考えていけたら嬉しいです。

(遠山洋一●東京・バオバブ保育園ちいさな家園長)

実践

震災・余震・放射能が子どもに与える 心理的負担をどう考える

■心理的負担を抱える

この度の東日本の震災で、被災された方々のことを思うと、心が痛みます。少しでも力になりたいと多くの方が行動しておられます。被災地の片づけに向向く人もあるでしょう。被災地に向向く人々や被災地を応援する人々を応援したり、義援金を集めたり、祈ったりして、さまざまな応援の仕方があると思います。

その小さな働きの積み重ねと継続が、大きな実を結ぶのです。できることを、少しずつ、長く応援するこ

とが、被災にあった方々への慰めと、励ましになると思います。

■通常の保育をめざす

3月12日も通常どおり保育を行い、翌週月曜日の14日は、鉄道の運行が乱れているので、近くに住む職員で保育をすることに決めました。しかし、ほとんどの職員が、車に乗り合わせたりして、出勤してくれて、本当に頭が下がりました。

このようなときこそ、社会を支える保護者をバックアップするのが保育園の使命。負担をかけず、心配をしないで職場や家庭への対応ができるように保育園の保育は、すべて通常どおりを心がけました。給食も保育時間も通常どおり、例えば食材が手に入らないことが起きても、ご飯だけはできますという給食の担当者、どんなことをしても出勤してくる職員の前向きな姿勢に、助けられました。

■子どもの正直な反応と日常の保育の価値

その後余震と放射能の問題で、緊張がなかなかほぐれません。

「やめてよ」と、3歳児のA子ちゃんに小突かれました。地震緊急速報が入ったので、園内の放送を入れた後、子どもたちのところに行って、座ったとたんにいわれ、「本当にそうだね。ごめんね」といってしまいました。

余震で揺れる中、その子がハイテンションになり、しゃべり続けるので、他の子もしゃべり続けていました。子どもたちに、保育者が「こころを静かにするよ」といい、みんな一斉に黙って余震に耐えていました。

その様子を観ていて、次の日の朝の打ち合わせで、「静かにしなくてもいいよ。子どもの中から出てくるものは否定せず、すべて意味があると受けとめてほしい」とお願いしました。そして、子どもは吐き出して、

心身を調整しているのだから、おさえ込まないで、その子の状態を理解するチャンスとなること、さらに共感につながることを伝えました。

それからみんなで、「そのほうが、子どもどうしても、大人も互いに心身を調整していけるから、いつもどおりでいきましょう」と確認をしました。

この理由なき反抗、反応が、じつに大事であることを、私たち保育現場には日常で経験しています。この経験がいかされる保育現場には、子どもの中に生じるストレス反応を回復する環境があるといえます。日常性の確保が非常に大事だということです。

それが確保されている保育園での生活は、今後評価すべき事項として検証しておくべきだと考えます。

震災の次の日から、生活のリズムが確保され、友だちがいて、傍で見守る大人がいることは、ストレスを抱える子どもの回復力を高める一助となったことは事実です。震災から2か月半を経過し、ストレスを抱えている子を見ることがないのは重要な事実です。

余震の問題だけでなく、マスコミを通じて流される被災状況や放射能の問題、それを見て抱く恐怖感、不安感、緊張感などからくる心理的負担は、潜在的なストレスとなっているはずです。今後の社会的課題とならなければ…と懸念します。

(川副孝夫●千葉・風の谷保育園園長)

こころ
の
風景

1

ターニングポイント

Tは、年長の4月から私たちの園に来るようになりました。前の園ではみんなと遊べず、職員室にやってきては机の上の物を床にひっくり返すなどしていたようで、背景には父親のDVがありました。途中から来たこともあり、他のみんなと行動を合わせることも苦手で、みんながお昼に向かっても、遊び続けていた4月。食事好き嫌いが結構ありました。

5月のある日、たまたまお昼を一緒にした私でした。おかずはTの嫌いなきんぴらごぼうで、「食べない!」とわがまをいうTです。「台所で一所懸命つくってくれたおかずだよ」と説明しても聞く耳をもたず、「遊

びたい」を連発。「嫌いだったら、少しよそえばよかったのに」と問いかけると、「当番がよそったから」と周りの子が代わって弁護。「じゃあ、食べられそうなので分けていいから、それを食べよう」と話しても、お皿を前に押しのけるほどです。

さてどう出るかなと思って、「食べないと遊べないよ。お家にも帰れないし。園長は付き合うけど、保育園に泊まっていくな」と私。ところがちょっと席をはずした隙に、Tは気持ちが治まらなくなったのか箸を折ってしまったのです。「お母さんがTのために一所懸命働いて、用意してくれたお箸だから、また買って

保護者と保育者を結ぶ保育へ

…はたして、保護者との連携はできるのか

最近、保育現場から子どもの育ちの変化についての深刻な状況がよく聞かれるようになった。「生活習慣の大きな乱れ」「運動能力・体力の低下」「テレビやファミコンなどのメディア漬け」「地域の子どもの遊びの喪失」「特別支援を必要とする子どもの増加」等々である。これらは、つまるところ、園での個々の保育者だけの努力では解決できない問題である。つまり、保護者との連携を抜きには、解決することができない問題となっている。まさに保護者との強い連携のあり方が問われている。

しかし、今、はたして保護者との連携がうまく進むのであろうかという心配もある。近年、保護者との関係に悩む保育者は多くなり、それを理由に、心を病み職を離れるケースも少なからずあるようである。

一方、園や保育者とのかかわりを深めることに消極的な保護者も増えている。最近、入園の問い合わせのとき、よくある質問の1つに「保護者が園に出て行かなくてはならないのは、年間どのくらいあるのか」というものがある。保育参観など園行事等々に保護者自身が、園まで出向いて参加する機会の頻度を問うものである。その質問の背景には、「できれば、なるべく園に出ていかないほうがよい」という保護者の思いが見

え隠れする。

さらに先日、仲間の幼稚園長と話していると、「保護者会」「母の会」「PTA」というような組織がまったくないという園が増えてきていることを耳にした。私にとっては、そのような組織があることが、当たり前になっていたのが驚いた。確かに、保護者会などが、形式的でマンネリ化していて、魅力を失っていたり、保護者の生活の状況によって組織することがむずかしいことはあると思うが、社会変化の中で、保護者と園長と保育者がともに集い、互いにコミュニケーションをとる場がだんだん狭くなっている現実でもある。これは、社会全体の風潮として、皆でやることの煩わしさ、集うことの面倒さ、個々の生活の忙しさが反映していることであると感じている。

.....●.....●.....●.....

私は、あらためて、保護者との連携のやり方を見直していくべきだと考えている。中でも、強く思うことは、保護者に、私たちのベースとなる保育という「いとなみ」をもっと広く開示し、保護者を、保育そのものに巻き込んでいきたいということである。保育は、子どもに向かうだけのものでなく、保護者へ向けても、育む力をもっていると思うからである。その育みは、



なんていえないよ」するとTは、「セロテープがほしい」と折れた箸をつないで食べはじめたのです。

でも、いったん折れた箸ではうまく食べられません。「明日、お箸つくってあげるから、お母さんに新しいの買ってって絶対いっちゃだめだよ」と私。「どうやってつくるの?」「保育園のまわりには、ほら木がいっぱいあるだろ。あの木でつくるのさ」「木はすぐ腐っちゃう

よ」と賢い返事。「大丈夫、任せて」と、少しずつ心が通じ合ってきた2人です。「どんな箸つくろうか。口に届かない位の長〜いお箸つくっちゃおうか」と笑い話もするうちに、責任を感じたのか、「園長の箸を貸してくれ」なんていい出して、2つに分けた多いほうのきんぴらごぼうを食べてしまったTでした。

さて翌日、約束の箸は孟宗竹を割ってつくったのですが、昨日長い箸の話をしたので、Tに好きな長さを印してもらったのです。すると、なんと箸箱にぴったりの大きさだったのでした。

箸職人になった園長を見て、「大きくなったら、俺は大工さんになる」と、できすぎたドラマのように終わったのですが、このことがきっかけになって、このあとどっしり腰のすわったTです。

(鈴木眞廣●千葉・和光保育園園長)

必ずやよい連携につながっていく。

ただし、保育を保護者に向け、それがよい連携を生み出すためには、2つの条件があるように思う。



1つ目の条件は、保護者の「参観・参加・参画」が、保育の中により明確に位置付けられることである。これは、保護者自ら、集団保育の場を体験していき、集団としての子どもたちの中で、自分の子どもの成長を確かめ、保育者や他の保護者とともに喜び合える感覚や思いを湧き出させていくプロセスづくりといえる。

園生活の中での子どものようすを見て成長を確かめていく「保育参観」、子どもたちと一緒に活動したり、保育活動のサポートをしながら子育ての楽しさや喜びを実感覚としてとらえられる「保育参加」。さらには、本来の保育や園行事を保護者自身が、はじめから計画立案していく「参画」もできればよいと考える。保育に、保護者としてより主体的なかわりを求めていく試みである。

2つ目の条件は、保育者の成長である。保育者の重要な専門性として「保護者に寄り添い、理解し、受けとめる力」を養成していくことである。保育者が保護者にどうかわることができるかは、これからの「保育の課題」であると考え思っている。

保育者と保護者との心の連携をしっかりと築いていくためには、保育者が、保護者にかかわるための専門的な能力が必要である。「保護者に寄り添い、理解し、受けとめる力」の養成は、一部で、すでに研修が進んでいる旨も聞いているが、今後とも、より深く、広く進めていけることを期待したい。

(黒田秀樹●福岡・きらきら星幼稚園園長)

編集後記

◎大連立が構想される中で

東日本大震災は、被災地に未曾有の被害をもたらしました。川副委員の報告のように、千葉でも試練に立ち向かう保育者や子どもたちの様子が伺えます。同時に、日本全体が“新しい国づくり”を模索しなければならない状況に追い込まれた感も否めません。

一時停止していた新システム論議は新たなステージに向けて動き出しましたが、もとより、新システム論議がはじまると同時に全私保連と全日私幼が「緊急共同声明」を記者発表し、それを受けて両組織の研究機構が合同研究チームを結成

し、月1回のペースで“現場主導の実効性の高い「こども指針」づくり”に挑み、今に至っています。

実効性の高さを追求すると次から次へと難題が現れます。保育実践という奥の深い意味でファジーなものを「指針」＝「文言」にしても、保育の質が担保されるとは限りません。遠山先生の文章にあるように「保育の質」を規定するとき、実践自体が良質であるなしを論じるよりも、実践場面を振り返り評価する日常の必要性、また評価の切り口が質にかかわるという認識が広がりつつあります。その過程に保護者もかわり、『ともに育てる』関係を築いていく観点が欠かせないことも、遠山先生は訴えられています。

今回の「ニュースレター」から正式に幼保合同研究チームの幼稚園側のメンバーからも輪番で寄稿していただくことになりましたが、いみじくも今回の黒田先生（きらきら星幼稚園）は遠山先生と同様に、「保護者の参観・参加・参画」ということなしでは良質の保育（幼児教育）が担保できない主旨の文章を投稿されました。

小学1年生のおおよそ半数は「保育園育ち」、そして半数は「幼稚園育ち」という日本の現実を直視したとき、昨今、急速に進んできた赤ちゃんや子どもに関する専門的知見や諸外国を含めた数々の実践モデルを幼保で共有し、現場主導で新たな子ども観をつくりあげていくことが課題であると思われます。そのような取り組みがあつてこそ、学校教育のあり方をふくんだ小学校との連携について議論する土壌は醸成され、実質的な改革に向けたムーブメントを起こすことが可能になると見通します。

また、今回からシリーズで鈴木委員長の「こころの風景」を連載します。現場の保育士さんにもぜひ、読んでいただきたいコーナーです。今回の「ターニングポイント」で、実際にT君のような子どもに寄り添える保育者がどれほどいるだろうか、と自戒の念をこめて感じました。

今、「家庭との連携」「地域との連携」「子どもどうしの関係性の構築」など、今後の子どもの育ちや園運営にとって必要不可欠な事案がどことなく「文言」として踊っているような気がしてなりません。

「子どもと保育者」「子どもどうし」「保育者どうし」「保育園と保護者」「保育園どうし」「保育園界と幼稚園界」「就学前教育と学校教育」、これらの関係性を「連携」という硬い表現で模索すると、形式化、形骸化に陥りかねないように感じます。「T君とえんちょう」のやりとりのような“心の通じ合い”を基本にした関係づくりが「ターニングポイント」になるのではないかと政界で大連立構想がささやかれる状況でおもうこの頃です。

(片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長)

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp